

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部 創立10周年に寄せて

「すごい滝があるそう
だ。見たことあつか」上
から降ってくるように、
岩を滑り落ちてくるん
だ」「ドドドッ、ドドド
ッ。何とも大きな音がす
るようだ」

小さいころに聞いた四
十八滝の様子だ。小学校
の二年生か三年生のころ
だったろうと思うが、祖
母に連れられて「夜ごも
り」に行った。

住田町とのちょうど境
にある陸前高田市横田町
の橋の上地区。集落のば
あちゃんたちが六人ぐら
いで毎年三月二十八日と
九月二十八日、地区の大
きな桂の木のそばにある
小屋に、お煮しめや団
子、漬け物を持ち奇っ

て、みんなでお経をあ
げ、拜んだ後に食べなが
ら懇談する。その折に四
十八滝の話題になったの
だった。

四十八滝への好奇心が
探検を決心させた。六年
生に上がろうとしていた
三月の春休み、同級生六
人ほどで滝の探検に出か
けた。

気仙川に沿うように山
道を歩く。ケヤキやイタ
ヤ、クルミなどの大きな
広葉樹に覆われた道だ。
沢に出ると両側の山肌が
扉のように迫ってくる。

「ザザーッ、ザザーッ」と
遠くに音がする。沢の上
流には二筋の太い帯を垂
らしたように水が勢いよ
く流れている。初めてみ

る四十八滝だ。

「すごい」。息をのんだ
みんなの表情がそう語っ
ていた。水しぶきに濡れ
ることもかまわず滝に近
づいた。仰ぎ見るとつい
吸い込まれそうになる。
思いはさらに募っていっ

た。
「四十八滝というが、
滝が四十八あるのか」
「あの滝の水はどこから
きているんだ」

中学校の二年生か三年
生だったと思うが、同級
生三人でまた探検に出か
けた。探検への興味、知
ることへの欲求が滝へと
向かわせた。初めて見た
滝のところがまてくると、
沢を挟み込むように山が
切り立っている。

這っては進み、手を伸
ばしては木の根本や幹に
掴まり、じつくり登って
いく。二百メートルの山に
入ったのだろうか。「ゴゴ
ーッ」と水音が聞こえ、
木と木の間に白い太い
帯状の水が見えた。
「すごい滝だ。大きい
口」であった。自然の營

四十八滝の誘い

陸前高田市横田町 菅野勝寿

から三百は進んだらろ
うか。

「オーイ。こた、ここ
だ。先頭が何かを発見
したようだ。なんと、岩
の間から水が勢いよく溢
れ出ていたのだ。岩
とコケ、様々な木々の静
かな森、湧き出る水。す
べてが解け合っている。
それは「わっくち」(湧
き)であった。自然の營

た。時を忘れさせる雲囲
気がそこにはあった。
小中学校時代の記憶
は、ふるさとを離れても
胸の奥深くしまひ込まれ
ている。

中学校を卒業したあと
神奈川県内の自動車工場
で働いたが、祖父母、父
や母、兄妹が大事にして
きた四十八滝を思い出す
ことがあった。お盆や正
月帰ってきたときには訪
ねてみたくなる。写真を
撮るキッカケをつくって
くれたのも四十八滝だっ
た。

「わっくち」、滝沢、気
仙川、横田の山々、そし
て五葉山。小さいころか
みの姿を飽きることなく
じっと眺め、佇んでい

らふるさとの自然に包ま
れていること、ありがた
さが分かってきたように
思う。
今ここにいて、ここ
に暮らせることに「幸
せ」の姿があると気づか
される。山の自然が人々
の心を清め、心を耕して
いる。知らず知らずのう
ちに自然がもたらす力で
ある。いつかまたあの
「わっくち」を訪ねてみ
たいと思う。



少年の心を捉えた四十八滝 (陸前高田市横田町)

ニッシーセイ